

放課後児童支援員等に求められる専門性及び資質向上のあり方・放課後児童クラブ C 票の詳細分析

静岡英和学院大学

玉井 紀子

本研究では、子どもからみた放課後児童クラブの状況や支援のあり方、子ども自身のニーズを把握することで、現状を理解することを目的として、放課後児童クラブに利用している子どもたちに調査を実施した。保護者に対する調査結果とともに、利用者視点から求められる支援者に必要とされる専門性や研修内容を検討するための資料とする。

児童票 C-1（低学年用）、C-2（高学年用）を各放課後児童クラブに低学年 1 票高学年 1 票ずつ、各 2261 票配布した。その内、データ完全締め切りまでに日までに到着した調査票は、低学年 1085 票、高学年 994 票でこれらを分析対象とした。

5-1 放課後児童クラブを利用する子どもの属性

回答者の学年別の内訳は、Table 5-1 に示している。なお、表内の％は、それぞれ、低学年、高学年全体に占める割合である。低学年では 3 年生が最も多く 442 名（40.7％）で、高学年では 4 年生が最も多く 553 名（55.6％）であった。これは、放課後児童クラブに所属している学年の割合とも考えられるが、回答を得やすい学年を反映した結果であるとも考えられる。よって、本研究の回答者は、中学年（3、4 年生）が全体（N=2079）の内、995 人（47.9％）で約半数となっている。

また、性別では、低学年、高学年ともに女兒の方が多く、低学年で 653 人（60.2％）、高学年で 615 人（61.9％）と、いずれも 6 割が女兒で、残りの 4 割弱が男児であった。

Table 5-1 通所児童の学年別の人数とその割合

	学年	n	%
低学年 (N=1085)	1年生	244	22.5
	2年生	399	36.8
	3年生	442	40.7
高学年 (N=994)	4年生	553	55.6
	5年生	265	26.7
	6年生	172	17.3
	欠損値	4	.4

Table 5-2 通所児童の性別の割合

	性別	n	%
低学年 (N=1085)	男	426	39.3
	女	653	60.2
	欠損値	6	0.6
高学年 (N=994)	男	375	37.7
	女	615	61.9
	欠損値	4	0.4
全体 (N=2079)	男	801	38.5
	女	1268	61.0
	欠損値	10	0.0

Table 5-3 低学年の放課後児童クラブへの通所開始学年

	n	%
1年生	1009	93.0
2年生	43	4.0
3年生	22	2.0
欠損値	11	1.0

N=1085

Table 5-4 低学年における通所期間

期間	n	%
1年未満	291	26.8
1年	385	35.5
2年	405	37.3
欠損値	4	.4

N=1085

Table 5-3 は、低学年の放課後児童クラブへの通所開始学年の人数とその割合を示したものである。1年生から通所している児童が1009人、93.0%であった。なお、高学年については質問票に不備があり、質問の意図の解釈が異なる可能性があるため、今回の結果の分析からは除外した。通所期間については、通所期間は、3年生の回答者が最も多かったことから2年目が405人で37.3%と最も多かったが、1年～2年目も385人で35.5%とほぼ同様の人数であった (Table 5-4)。

5-2 放課後児童クラブを利用している子どもの活動内容

(1) 低学年の活動内容

放課後児童クラブにおける児童の活動内容は、学年別、男女別に見てみると (Table 5-5 参照)、1年生男子 (n=100) では、「部屋遊び」が最も多く、91人 (91.0%) が活動内容としてあてはまると回答していた。次いで、「宿題」が86人 (86.0%) で、「おやつ」が79人 (79.0%)、「外遊び」が76人 (76.0%) で、「お話し」は5割程度で、その他の2割の回答と

しては、「図書、本読み」、「体育館」、「英語教室 (月1回)」などの回答が見られた。

1年生女児 (n=143) は、ほぼ男児と同じ傾向で、「部屋遊び」が135人 (94.4%) と最も多く、次いで、「宿題」が132人 (92.3%)、「おやつ」が119人 (83.2%) と続き、男児よりも「お話し」と回答した割合が高く87人 (60.8%) で、「外遊び」は男児よりも割合が低く94人 (65.7%) となった。その他は約3割の回答が見られたが、外遊びや部屋遊びに該当される回答も多く、具体的には、「DVDを見る」、「たんじょうびかい」、「ピアノ」などの回答があった。

2年生 (男児 n=169、女児 n=229) では、性別による差が見られたのは、「外遊び」で1年生と同様に男児の方が多い傾向があるが、その他に男女の回答で大きな違いは見られなかった。「部屋遊び」が約90%、「宿題」が約85%、「おやつ」が80%となっている。その他の活動内容としては、「パソコン」、「イベント (お誕生日会、クリスマス会)」、「おとうばん」、「掃除」などが、1年生には見られない回答として挙げられていた。

3年生 (男児 n=157、女児 n=281) では、男児の

Table 5-5 低学年の放課後児童クラブでの活動内容

活動	性別	1年生		2年生		3年生		低学年全体	
		n	%	n	%	n	%	n	%
外遊び	男	76	76.0%	126	74.6%	115	73.2%	317	74.4%
	女	94	65.7%	152	66.4%	205	73.0%	451	69.1%
	合計	170	70.0%	278	69.8%	320	73.1%	768	71.2%
お部屋で遊ぶ	男	91	91.0%	156	92.3%	133	84.7%	380	89.2%
	女	135	94.4%	211	92.1%	260	92.5%	606	92.8%
	合計	226	93.0%	367	92.2%	393	89.7%	986	91.4%
お話し	男	51	51.0%	101	59.8%	78	49.7%	230	54.0%
	女	87	60.8%	132	57.6%	175	62.3%	394	60.3%
	合計	138	56.8%	233	58.5%	253	57.8%	624	57.8%
宿題	男	86	86.0%	143	84.6%	137	87.3%	366	85.9%
	女	132	92.3%	200	87.3%	250	89.0%	582	89.1%
	合計	218	89.7%	343	86.2%	387	88.4%	948	87.9%
おやつ	男	79	79.0%	135	79.9%	118	75.2%	332	77.9%
	女	119	83.2%	185	80.8%	217	77.2%	521	79.8%
	合計	198	81.5%	320	80.4%	335	76.5%	853	79.1%
その他	男	19	19.0%	43	25.4%	31	19.7%	93	21.8%
	女	41	28.7%	56	24.5%	56	19.9%	153	23.4%
	合計	60	24.7%	99	24.9%	87	19.9%	246	22.8%

「部屋遊び」が133人(84.7%)と他の学年に比べると少なくなり、「お話し」も78人(49.7%)と減り、それに比べて女児の割合が高く、「部屋遊び」は、260人(92.5%)、「お話し」は175人(62.3%)と、活動内容が性別によって若干異なる様子が伺えた。「宿題」、「おやつ」はほぼ9割、8割弱と性別による違いはなかった。その他の活動については、「ごはんづくり、クッキング」、「ゲーム」、「先生のお手伝い」、「おでかけ」などの回答も見られた。

低学年の活動内容は全般に、室内での遊びを9割以上の子どもが活動として挙げていたが、外遊びは、7割前後にとどまった。これは、放課後児童クラブの敷地や場所といった環境が影響している可能性もある。

また、宿題・勉強を行っているという回答した子どもは約9割で、これらの高い活動率は保護者の要望などが反映されていることも考えられる。その他の活動としては、「体育館」や「遊戯ルーム」といった児童クラブの近くや児童館、学校内に設置された場所で過ごすことや、「〇〇会」、「お料理」や「おでかけ」などがイベントとして行われていることが推

察された。

(2) 高学年の活動内容

次に、Table 5-6は、高学年の学年別の活動内容を示している。4年生男児(n=241)では、「宿題」が最も多く178名(83.2%)、次いで「部屋遊び」が172人(80.4%)、「外遊び」が157人(73.5%)となっており、「おやつ」は148人(69.2%)、「お話し」は103人(48.1%)、と低学年よりも活動内容とした回答した割合が減っており、過ごし方に個人差が出ている様子が伺える。最も回答者の多い4年生女児(n=338)では、やはり「宿題」が306人(90.5%)と男児と同じく最も多く9割を超えていた。次いで、「部屋遊び」が304人(89.9%)、「おやつ」が273人(80.8%)で、「外遊び」(217人、64.2%)と、「お話し」(211人、62.4%)が殆ど同じ割合であった。その他の回答としては、「お誕生日会」、「お楽しみ会」、「クリスマス会」といった季節ごとのイベントや、「図書館」といった記述も見られた。女児では「クッキング」、「手づくりらんち」と数名が料理と答え、その他独自のイベントと考えられるものとし

Table 5-6 高学年の放課後児童クラブの活動内容

活動	性別	4年生		5年生		6年生		高学年全体	
		n	%	n	%	n	%	n	%
外遊び	男	157	73.4%	72	75.8%	45	70.3%	274	73.5%
	女	217	64.2%	110	65.1%	65	60.7%	392	63.8%
	合計	374	67.8%	182	68.9%	110	64.3%	666	67.5%
お部屋で遊ぶ	男	172	80.4%	84	88.4%	54	84.4%	310	83.1%
	女	304	89.9%	154	91.1%	93	86.9%	551	89.7%
	合計	476	86.2%	238	90.2%	147	86.0%	861	87.2%
お話し	男	103	48.1%	54	56.8%	35	54.7%	192	51.5%
	女	211	62.4%	111	65.7%	75	70.1%	397	64.7%
	合計	314	56.9%	165	62.5%	110	64.3%	589	59.7%
宿題	男	178	83.2%	79	83.2%	47	73.4%	304	81.5%
	女	306	90.5%	146	86.4%	100	93.5%	552	89.9%
	合計	484	87.7%	225	85.2%	147	86.0%	856	86.7%
おやつ	男	148	69.2%	69	72.6%	43	67.2%	260	69.7%
	女	273	80.8%	124	73.4%	78	72.9%	475	77.4%
	合計	421	76.3%	193	73.1%	121	70.8%	735	74.5%
その他	男	48	22.4%	25	26.3%	12	18.8%	85	22.8%
	女	83	24.6%	41	24.3%	21	19.6%	145	23.6%
	合計	131	23.7%	66	25.0%	33	19.3%	230	23.3%

て、「子そだてのじゅんぴ」、「あんぜんてんけん」、「発表会」などの回答が見られた。

5年生（男児 n=95、女児 =169）は、「部屋遊び」が男女ともに最も多く、約9割を示しており、次いで「宿題」が約85%を示していた。男児では、「外遊び」が72人（75.8%）であるのに対し、女児は110人（65.1%）で、女児の方が割合が低く、「おやつ」は男児が69人（72.6%）で女児が124人（73.4%）とほとんど変わらないが、「お話し」は男児が54人（56.8%）に対し、女児が111人（65.7%）と女児の方の割合が高くなっていった。その他では、「イベント」の他に「スマホ」、「アイパット」などの記述が他の学年では見られず新たに見られた回答であった。

6年生（男児 n=64、女児 n=107）では、回答者が最も少ない学年であったが、男児では「部屋遊び」が54人（84.4%）と最も割合が高いのに対し、女児は「宿題」が100人（93.5%）と他の学年に比べても高い値を示した。一方で、男児の宿題は47人（73.4%）で、他のどの学年よりもその割合が低くなっていった。男女ともに「おやつ」も7割前後で、「外遊び」は、男児では45人（70.3%）と7割を示していたのに対し、女児は65人（60.7%）と他のどの学年よりもその割合が低くなっていった。その他では、具体的な記述が少なく、「マンガを読む」などが挙げられていた。

高学年の活動内容は全般に、低学年同様室内での遊び、宿題が8割を超えているが、女児では「お話し」の割合が増え、男児では「お話し」と「宿題」が低学年に比べて低くなっていた。

(3) 活動内容まとめ

Figure 5-1 は、Table 5-5、Table 5-6 の結果を低学年と高学年別にまとめてグラフ化したものである。低学年と高学年でまとめると、活動内容に特に大きな違いは見られない。「部屋遊び」と「宿題」が子どもたちからみた活動内容として多く取り上げられており、いずれも8～9割の子どもが活動内容として回答していた。また、「おやつ」は7～8割で提供されていることが伺えるが、高学年になるとその割合は若干減っていた。5、6年生では回答者も少なく、習い事が増える、家で留守番が可能などを想定すると毎日通っているのか、あるいは早退をするなど変則的な利用もあり得る。そのことが回答結果に影響したことは考えられる。その他、「お話し」としては、子ども同士、職員と子ども、など様々な場面が想定されるが、女児で高学年ではその割合が高くなっており、発達段階を考えると、学年が上がると室内で過ごすことも増え、選択的に活動を行っていることが推測された。

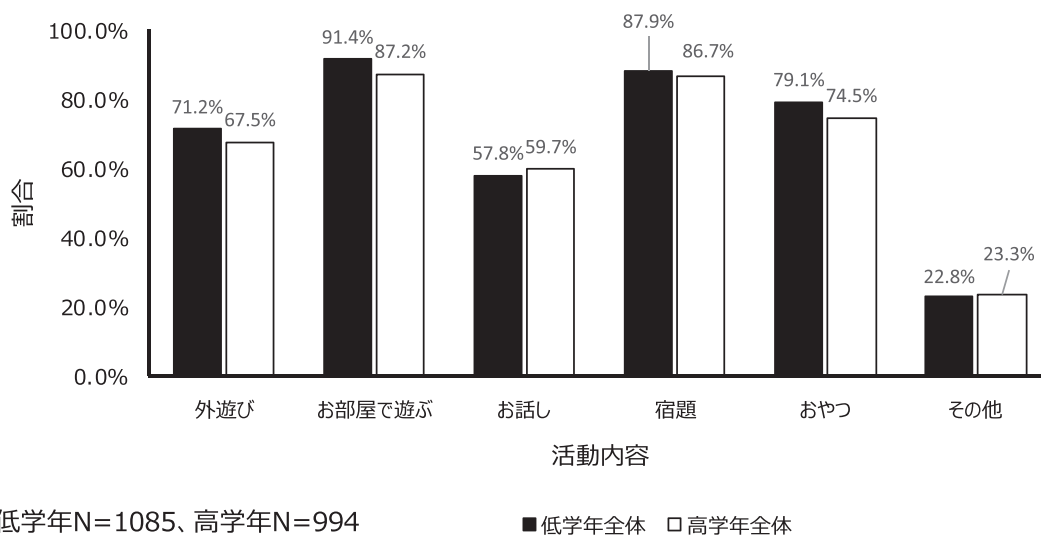


Figure 5-1 低学年と高学年の活動内容の比較

5-3 放課後児童クラブに通う子どもたちの状況

(1) 友だちの有無

「放課後児童クラブに仲の良い友達はいますか？」という質問に対しては、低学年では、1066人、98.2%が「いる」と答え、「いない」と答えた子どもは11人（1.0%）であった（Figure 5-2）。

高学年では、「いる」が972人で97.8%、「いない」が15人（1.5%）で（Figure 5-3）、殆どの子どもたちが友達がいると答えていたが、1%強の子どもが児童クラブ内に友達がいないと認識していることが示された。

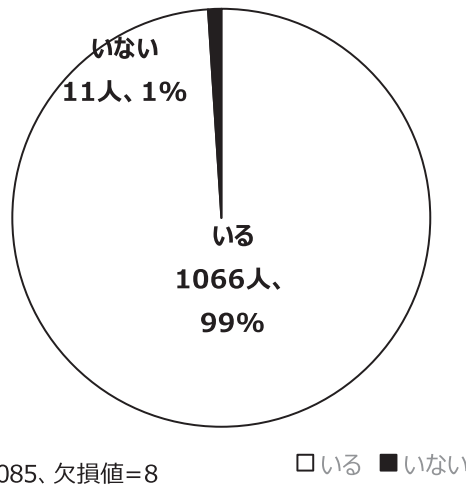


Figure 5-2 「放課後児童クラブに仲良く遊ぶ友だちはいますか？」（低学年）

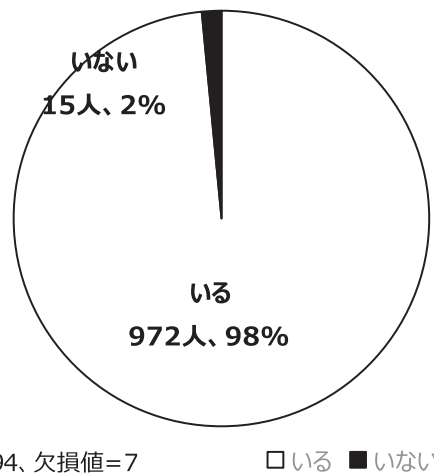


Figure 5-3 「放課後児童クラブに仲良く遊ぶ友だちはいますか？」（高学年）

(2) 評価

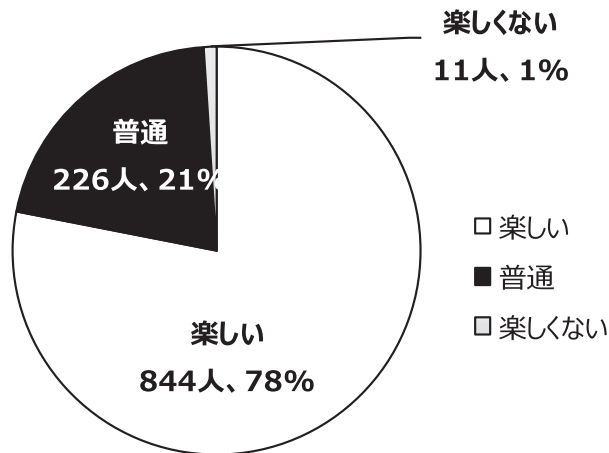
「放課後児童クラブは楽しいですか？」という質問に対しては、低学年では、「楽しい」が844人（77.8%）で、約7割が児童クラブを楽しんでいることが示された（Figure 5-4）。「普通」が

226人（33.6%）で、「楽しくない」が11人（1.0%）であった。なお、「楽しくない」の回答と友だちの有無との関連を見たが、友だちの有無と放課後児童クラブの「楽しさ」との間には関連はなく、子どもによる評価は、友だちの存在以外の要素も関連して

いることが推察された。

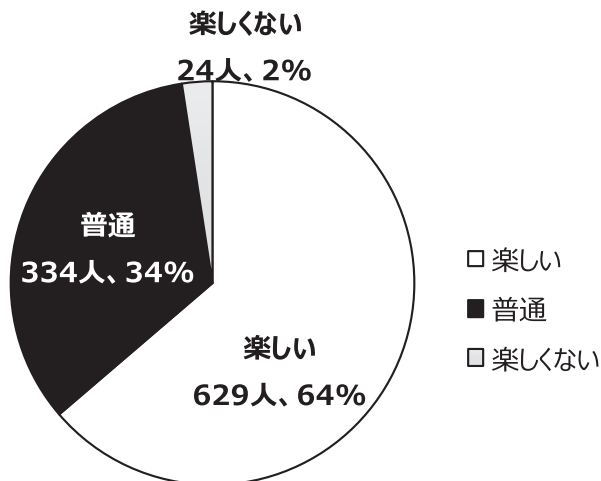
高学年では、「楽しい」が629人（63.3%）で低学年に比べると10%以上その割合が低くなっており、「普通」が334人（33.6%）とその割合が高かった（Figure 5-5）。「楽しくない」は、24人（2.4%）で、低学年同様、友だちがいないことと、放課後児童クラブに対する評価は必ずしも一致したものではなかった。98%以上の子どもたちが、少なくとも

「楽しくない」場所ではないと評価をしており、後述する満足感の点数の高さからもそれは伺える。ただ、回答者は、各放課後児童クラブで任意に選出してもらった子どもである。職員との関係性が良好な子どもに偏った選択がなされ、これらが高い評価に繋がった可能性があることは結果の解釈の際に注意が必要である。



N=1085、欠損値=4

Figure 5-4 「放課後児童クラブは楽しいですか？」（低学年）



N=994、欠損値=7

Figure 5-5 「放課後児童クラブは楽しいですか？」（高学年）

(3) 困っていること

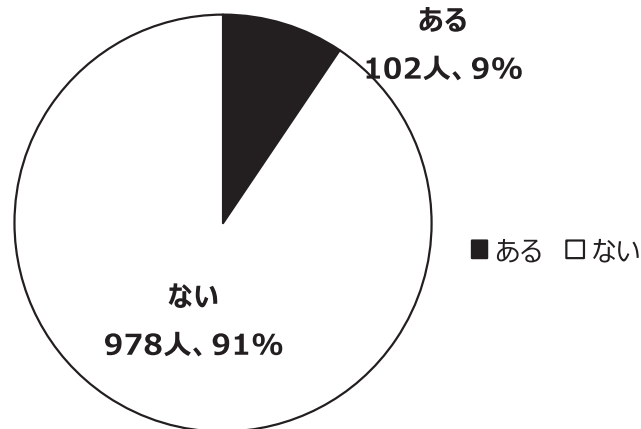
低学年には、「なにか困っていることはありますか？」を、「ある」、「なし」で回答を求めたところ、「ある」と回答した子どもが102人（9.4％）で、約1割が困っていることが示された（Figure 5-6）。

高学年には、同様の質問をしたところ、「ある」が215人で21.6％と2割以上の子どもが困ったことがあると回答した（Figure 5-7）。

高学年に対しては、具体的に困ったことについて尋ねたところ、Figure 5-8に示すように、最も多かったのが「部屋がうるさい」で121人（12.2％）が、次いで「遊ぶ場所が狭い」が75人（7.5％）と放課後児童クラブの生活環境に関することが挙げられていた。また、「ルール（決まり事）が多い」が51人（5.1％）、「好きなことをして遊べない」が37人（3.7％）、「おやつが食べられない、あるいは少ない」が25人（2.5％）、「外出できない」が19人（1.9％）と、放課後児童クラブでの集団での日々の生活や過

ごし方に関わる項目を3％前後の子どもが困りごととして挙げていた。

これらの回答から、放課後児童クラブによって、環境や設備が異なること、入所している子どもに対して十分な遊び場所が確保されておらず、活動が制限されている、そのことで派生するルールや、過ごす環境の不自由さがあること、またそれに対して「困りごと」としてあるいは、「不満」として子どもたちが捉えている可能性が示唆される。子どもの自身の評価であり、実際の状況との検討が必要であるが、多様な学年の子どもがともに過ごす空間として、十分であるのか、どの程度であれば子どものニーズに対応できるのか、対応のためには予算等も含めて何が必要であるのか、子どもからの意見として今後、整理・整備していく必要があると考えられる。また、これらを考慮した支援のための職員の意識作りや対応、支援方法なども職場内の研修やミーティング等では必要であると考えられる。

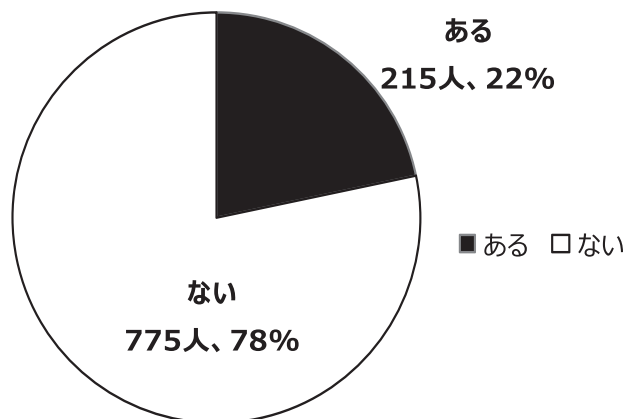


N=1085、欠損値=5

Figure 5-6 「なにか困ったことはありますか？」（低学年）

職員や友達といった対人関係に関わるものとして取り上げた項目では、「（先生（職員）、お友達、年上の子などに）嫌なことをいわれる」が32人（3.2％）と最も多く、「先生（職員）から怒られる」が18人（1.8％）、「先生（職員）と一緒に遊んでくれない」が12人（1.2％）、「先生（職員）が話を聞いてくれ

ない」が11人（1.1％）となっていた。



N=994、欠損値=4

Figure 5-7 「今いる放課後児童クラブで困っていることはありますか？」(高学年)

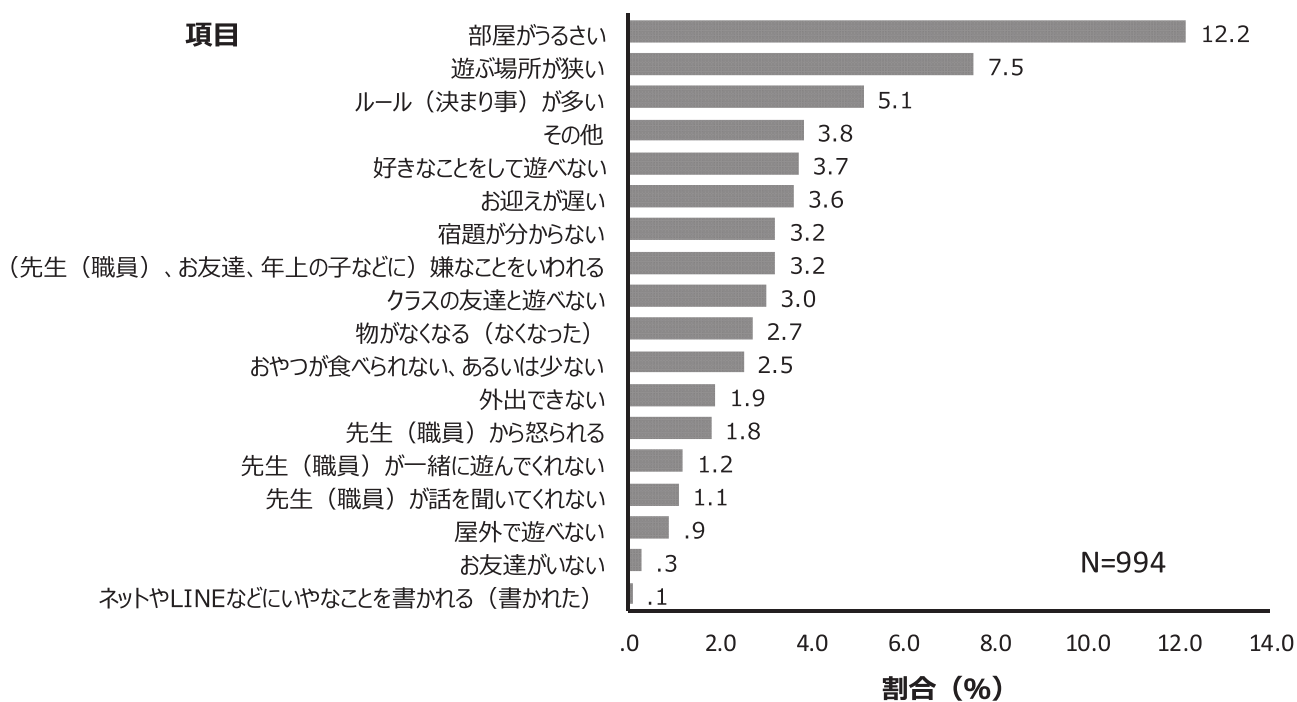


Figure 5-8 具体的に困っていることの内容と回答者の割合(高学年)

「その他」は、38人(3.8%)の回答があったが、その内、36人が具体的な内容を記載していた。その具体的な内容は、Table 5-7で示す。『子ども同士の関係性に関するもの』としては、「嫌なことを言われる」、「らくがき(悪口)をされたことがある」といった他者からこれまでにされて嫌だったことが挙げられており、「言うことを聞いてくれない」、「年下の子がいやなことを言う」といった学年による違

いから来る思い(e.g. “年下なのに”、“年下のくせに”など)を抱いた経験が推察される記述が目立った。

『先生(職員)に関すること』では、「一部の人がだけ注意される」、「ひいき」や「差別」をされる、「宿題を見てくれない」などが挙げられていた。具体的に(誰から)という記載はなかったが、「暴力を振るわれる」という記載が2件あった。そのため、カテゴリには分けず、網掛けで表記した。これらの記述は、

一部の子どもによる記載ではあるが、子どもたちは、自分に対する職員の関わりだけでなく、他の子に対する関わり方も良く見て観察し、自らの過ごし方や自分に対する評価をしていると考えられる。子どもの主観的な感想であるが、これらの子どもの思いを聞くことは、職員としてどう見られているか、といった関わり方を振り返る機会にもなり得る。また、子ども理解、子ども同士の関係の理解にも繋がり、そのことが子どもと職員との関わりに影響を及ぼすと考えられる。職場内でのカンファレンスやミーティング、あるいは研修などで取り扱うことも検討する余地があるだろう。

また、『放課後児童クラブ全般』に関することとしては、「知らないルールがいつの間にか決まっている」、「外遊びの時間が短い」といったルールに関することや、ゲームや本、おもちゃなどの備品に対する要望などが挙げられていた。Table 5-5 及び 5-6、Figure 5-1 などで示したように、児童クラブでの活動内容としては、「部屋遊び」が多くなっている。学年によって若干の活動内容の違いについて指摘したが、児童クラブによっては、外遊びの場所や時間が限られている、学年によって遊び場所や時間が決められている、などの制約や独自のルールがあることが推察される。

上記 (Figure 5-8) に示した選択肢と重複する内容もあるが、これらの記述は、個別に子ども自身が具体的に伝えたかった内容と考えられる。既に対応がなされていることも想定されるが、職員が気づいているのか確認が必要な内容も含まれる。子どもにとって、放課後の数時間を過ごす大切な空間 (場所) であり、子どもたち同士、職員はともに過ごして関わり支える大切な人である。子どもたちの権利擁護の観点からも生活環境の改善も含めて「子どもの声」である要望として今後対応が求められるだろう。

Table 5-7 高学年における「困っていること、その他」の回答の具体的な記述内容

カテゴリ	具体的な記述内容
子ども同士の関係性に関すること	<p>1年生がうるさい。 2年生が注意してもきいてくれない。 ていがかねんにいやなことをいわれる。 一年生にいやなことをされる。 下の学年がいうことをきかない。 年下の子がよびすてをする。外遊びをするはんい（とくに冬など）がせまい。 年下の子にいたずらされる。 年下の人にいやなことを言われる。 おもちゃのとりあい（レゴの部品がたりない）。 ケンカが多いとすぐいじける人がいる。 男子がうるさい。 同級生が少ない。 外遊びのルールを守らない人がいるが、先生が近くにいなくてまともらない。 らくがき（悪口）がかかわれていることがあった。 友達関係。 遊ぶ人がいない。</p>
	<p>ぼうりよされる。 ぼう力をふるわれる。</p>
先生（職員）に関すること	<p>1部の人しか注意しないこと。 さべつをされる。 そうじの場所のげんかんそうじは、せめて手ぶくろをそうちやくさせてほしい。四年生だから自分で考えてほしいというのは…。だから、わたしは、かえてきたとき「さきしゆくたい」とかいてほしい。 宿題をちゃんと見てもらえない。 先生（アルバイト）？の人に、やめてといってもやめてくれない。（例えばこしょこしょ）（くすぐる） 先生がえこひいきしたり、やりたくないことをむりやりおしつけてくる。</p>
放課後児童クラブ全般に関すること	<p>いつのまにか、知らないルールがきまっている。 おむかえが早すぎて遊べない。 外へ行っていい時間が30分で少ない。 外遊びの時間が短い。 トイレが、ときどききたない。 ひるねが長い（なくしてほしい）。 もっとたのしいことをしたいのに、うまくいえません。 しょうもない（おもちゃが）。 ゲームがしたい。 古い本しかないので、新しい本を入れてほしい。 もっとたくさん本がほしい。 先生がわかい人が少ない。</p>

5-4 放課後児童支援員等の支援状況

(1) お話を聞いてくれますか？

(Figure 5-9、Figure 5-10)

放課後児童支援員等の関わり方として、子ども同士のケンカや困っている際に職員が話を聞いてくれるかについて尋ねたところ、低学年では、832人(76.7%)が「聞いてくれる」と回答し約8割の子どもたちが肯定的な評価をしていることが示された。「ふつう」が229人(21.1%)で、「聞いてくれない」は11人(1.0%)であった。

高学年は、「聞いてくれない」という回答は0人で、「聞いてくれる」が938人(94.4%)で、全体(N=994)の約95%は、肯定的な回答を示していた。一方で、これまでの回答に比べて無回答が23人と増えており、答えやすさを考慮し答えの選択肢を絞って明確な回答を求めたが、高学年の場合、4件法などの段階を分けた回答形式の方が回答を引き出した可能性はある。ただ、それらを考慮しても、肯定的に捉えている子どもたちの方がかなり多かったと言える。

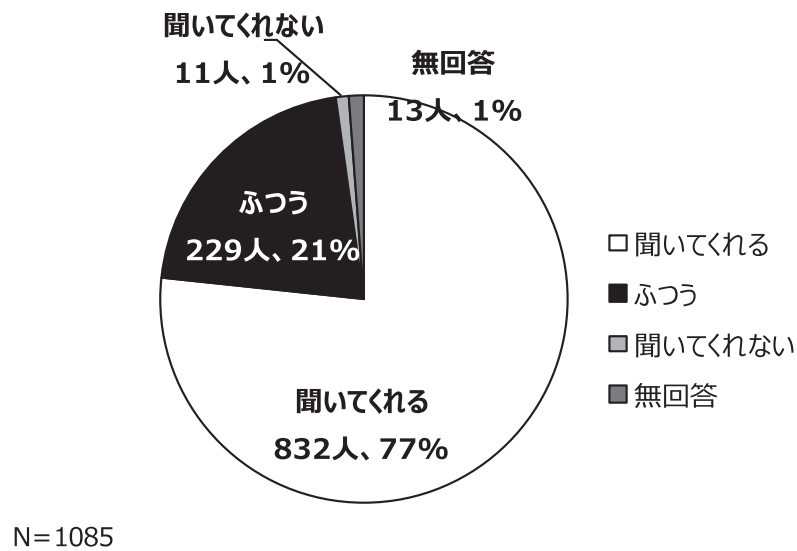


Figure 5-9 「お友だちとケンカしたり、困っていることがあると、先生（職員）は、お話を聞いてくれますか？」（低学年）

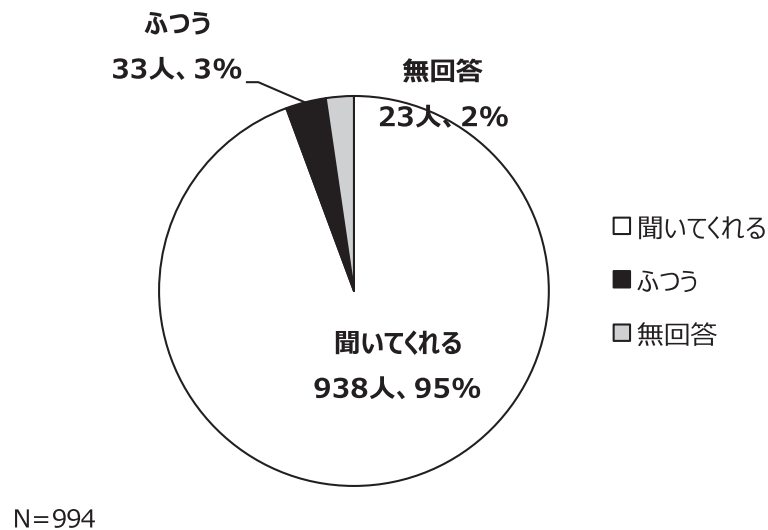


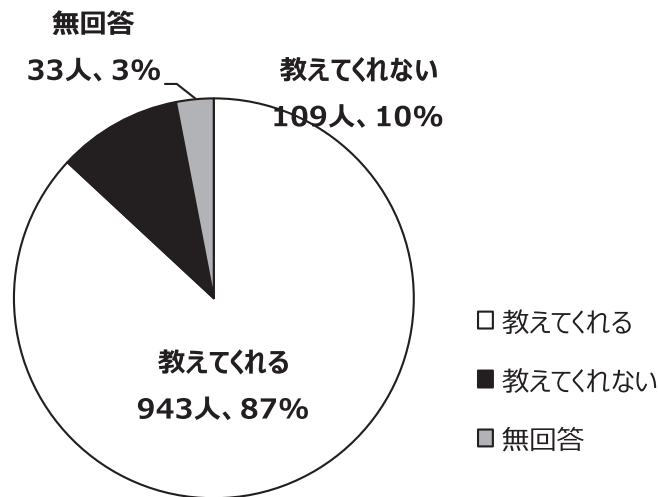
Figure 5-10 「普段、お友達とケンカしたときや困っていることがあると、先生（職員）は、あなたの話を聞いてくれますか？」（高学年）

(2) 宿題・勉強を教えてくださいか？

(Figure 5-11、Figure 5-12)

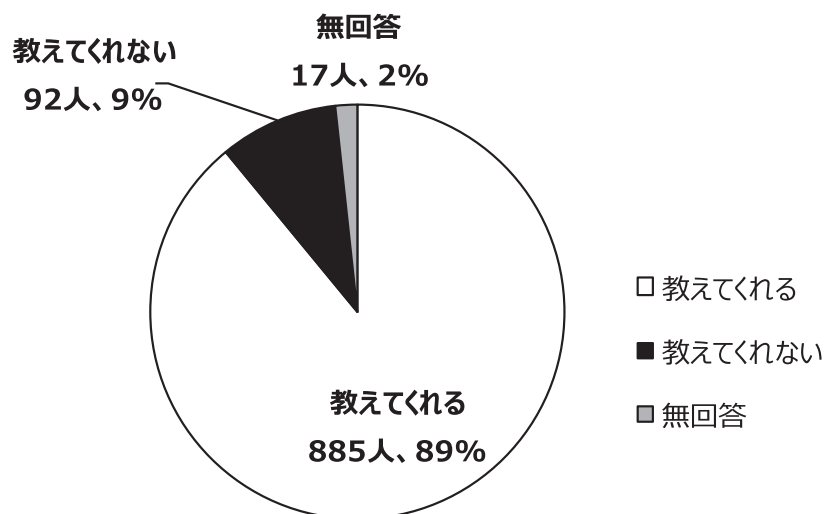
次に、8～9割の子どもたちが活動内容としてあげていた宿題・勉強について職員が教えてくれるかについて尋ねたところ、低学年では「教えてくれる」が943人(86.9%)で、9割弱、高学年は885人(89.0%)で約9割となっていた。「教えてくれない」については、宿題を活動して行っていない割合ともほぼ同じであることから、日々の児童クラブでの活動内容として挙がっていないため、「教えてくれない」という回答になったことも想定される。ただ、職員の

業務、支援内容として勉強や宿題を見ることはほとんどの児童クラブで行われており、後述する要望において、「もっと勉強を見て欲しい」という回答が2割程度あることから、「教えてはくれる」けど、丁寧に見て欲しい、あるいは（自分にとって分かるように）「教えてくれない」と思っている子どももいることも考えられる。勉強や宿題への要望は子どもにも保護者にもあると考えられる。ただ、職員がその要望に応えることができる体制や、環境も必要であるだろう。



N=1085

Figure 5-11



N=994

Figure 5-12 「宿題や勉強は教えてくださいか？」(高学年)

(3) 注意してくれますか？

(Figure 5-13、Figure 5-14)

「あなたやお友達が悪いことをしたとき、先生は、ちゃんと注意してくれますか？」という質問については、子どもたちの年に関係なく「注意してくれる」という回答が多く、低学年で1036人（95.5%）、高学年で964人（97.0%）となっていた。「注意してくれない」と回答した子どもは、低学年、高学年ともに約2%となっていた。これらは、実際に行っている注意が届いていない、注意しても子どもに届

かない、子どもによって注意の仕方に違いがあることなどによる回答も想定される。

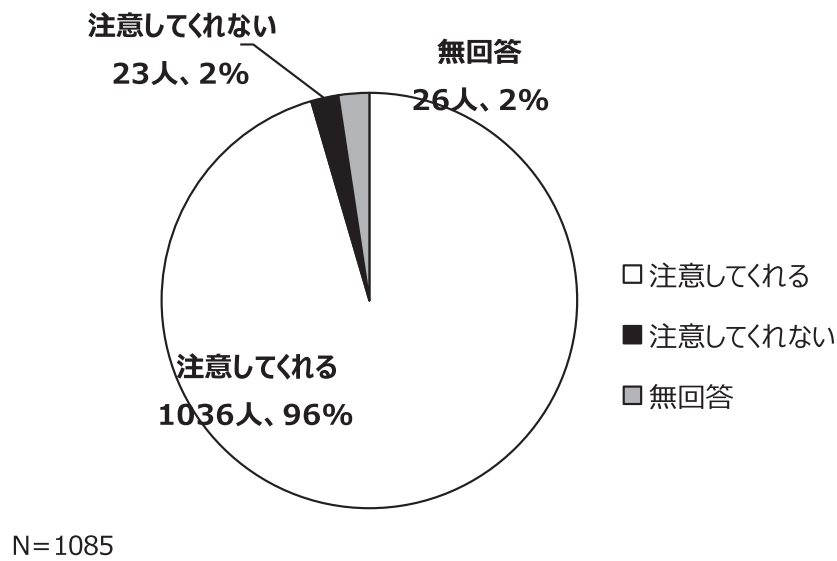


Figure 5-13 「注意してくれますか？」（低学年）

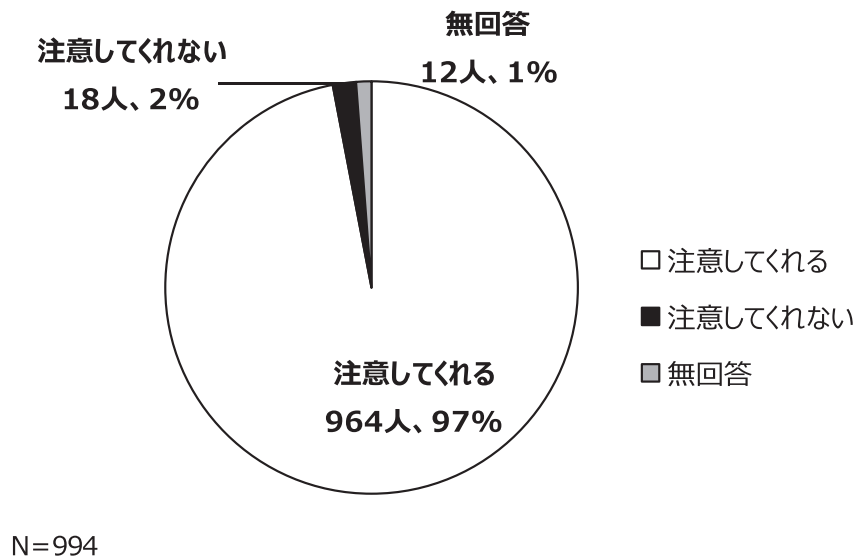


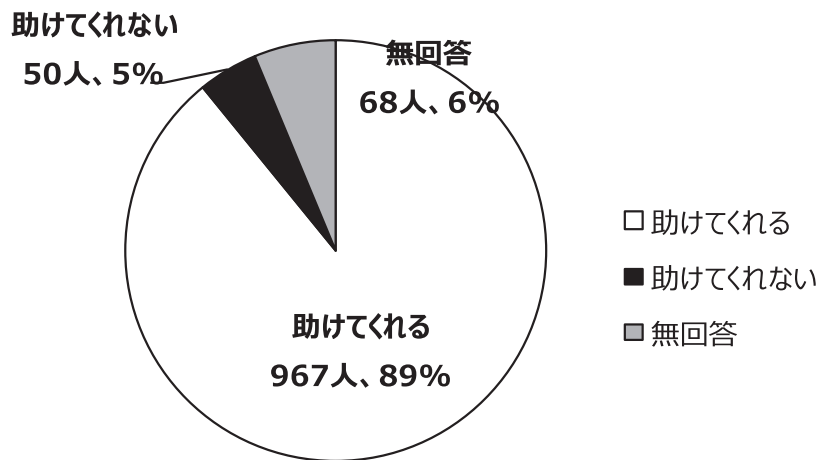
Figure 5-14 「注意してくれますか？」（高学年）

(4) 助けてくれますか？

(Figure 5-15、Figure 5-16)

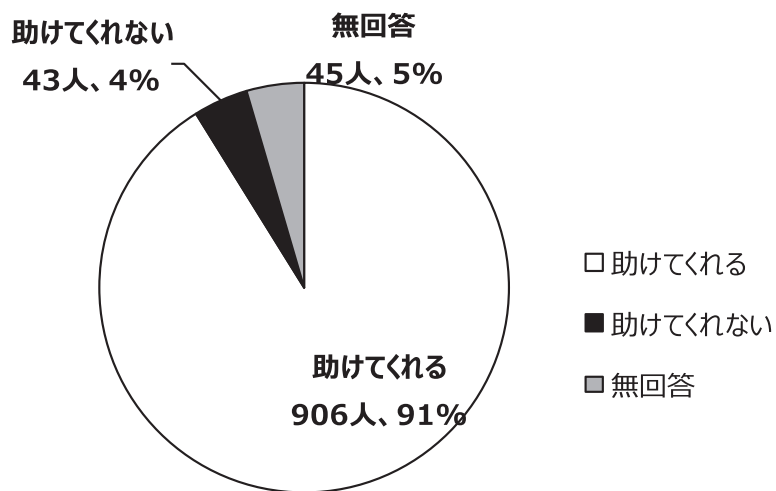
「お友達や、年上の子にイヤなことをされたり、言われたとき、先生は助けてくれますか？」については、低学年、高学年ともに「助けてくれない」と回答した子どもが約5%となった。Table 5-7の「困っている」こと具体例でも挙げられていたが、職員に言えないことや、言えない状況、見ていないところで嫌なことをされたり、何かされてしまったときに対応してもらえなかった可能性、困ったままで訴

えることができないと感じていることも考えられる。また、無回答も多く、回答することが難しかった、回答をしなかった場合も考えられ、個別に対応が必要なケースもあるだろう。無回答を入れると、約1割の子どもたちが「助けてくれる」と感じていないとも考えられる。これらの子どもたちへの対応の際には、職員の関わり方の問題、子どもの特徴、環境などの多角的な側面から検討していく必要があり、そういった視点を身に付けるための研修も望まれる。



N=1085

Figure 5-15 「助けてくれますか？」(低学年)



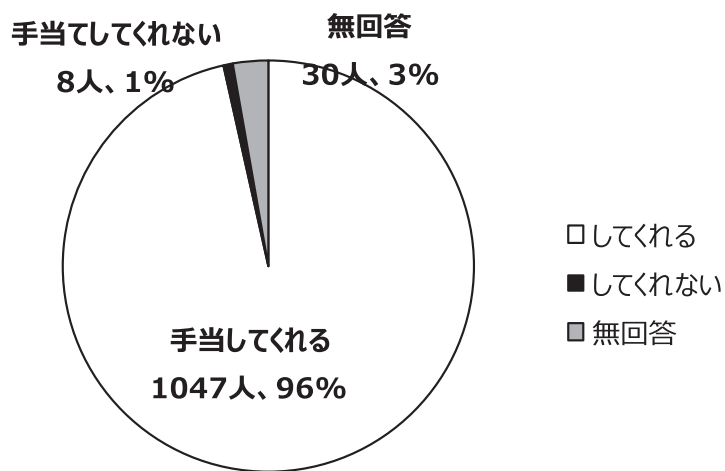
N=994

Figure 5-16 「助けてくれますか？」(高学年)

(5) 手当してくれますか？ いると言えるだろう。

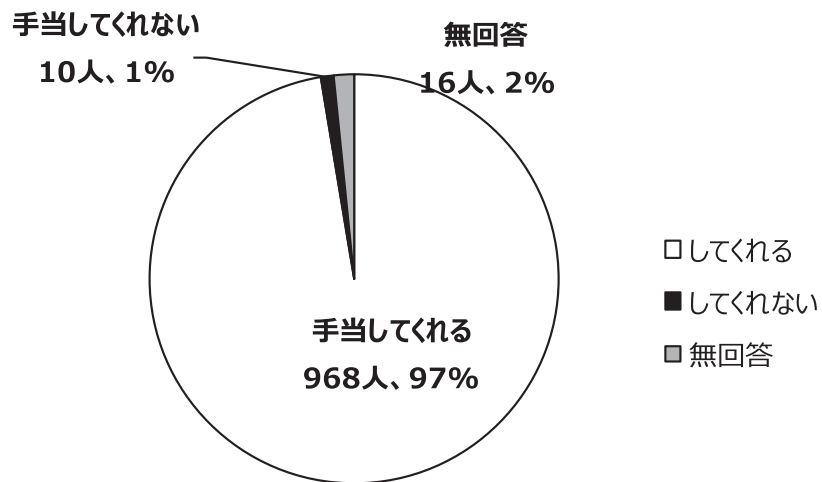
(Figure 5-17、Figure 5-18)

ケガや病気のときの職員の対応について尋ねたところ、低学年では、「手当してくれる」が1047人(96.5%)、「手当してくれない」が8人(0.7%)であった。高学年では、「手当してくれる」が968人(97.4%)で、「手当してくれない」が10人(1.0%)であった。事故やケガ、体調不良などの際の対応は職員の業務・支援としても大切なものであり、殆どの子どもたちが児童クラブを安心、安全な場所として認識できて



N=1085

Figure 5-17 「手当してくれますか？」(低学年)



N=994

Figure 5-18 「手当してくれますか？」(高学年)

5-5 放課後児童クラブを利用する児童の要望

(1) 職員への要望（低学年）

職員への要望について尋ねたところ、「ある」が243人（22.4%）であった（Figure 5-19）。また、低学年にはそれとは別に、どのようなことをしてほしいかという質問を行ったが、その回答はFigure 5-20に示している。「もっと一緒に遊んでほしい」が一番多く、427人（39.4%）で、次いで「もっといけないことや悪いことをした子に注意をして欲しい」が337人（31.1%）となっていた。「不明」は、

特に記載のなかった子どもたちである。「もっとお話を聞いてほしい」は、143人（13.2%）と最も選択肢の中では少ない回答となった。低学年という年齢、発達を考慮すると、大人である職員と一緒に遊んでくれることで、他児と遊ぶ（特に年長者など）安心感が得られたり、自分を見て欲しい、相手をして欲しいという素直な思いの表れであったり、自らが好きな遊びに純粹に付き合ってもらいたいなどの思いがあることが伺える。

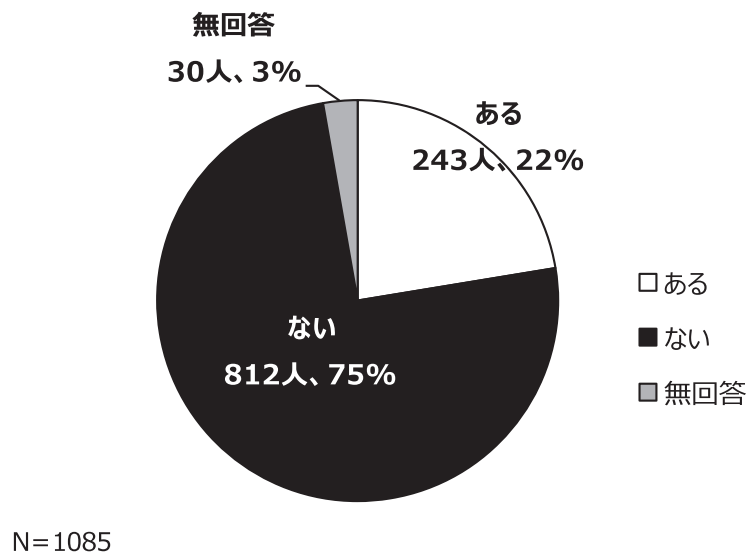


Figure 5-19 「先生にしてほしいことがありますか？」（低学年）

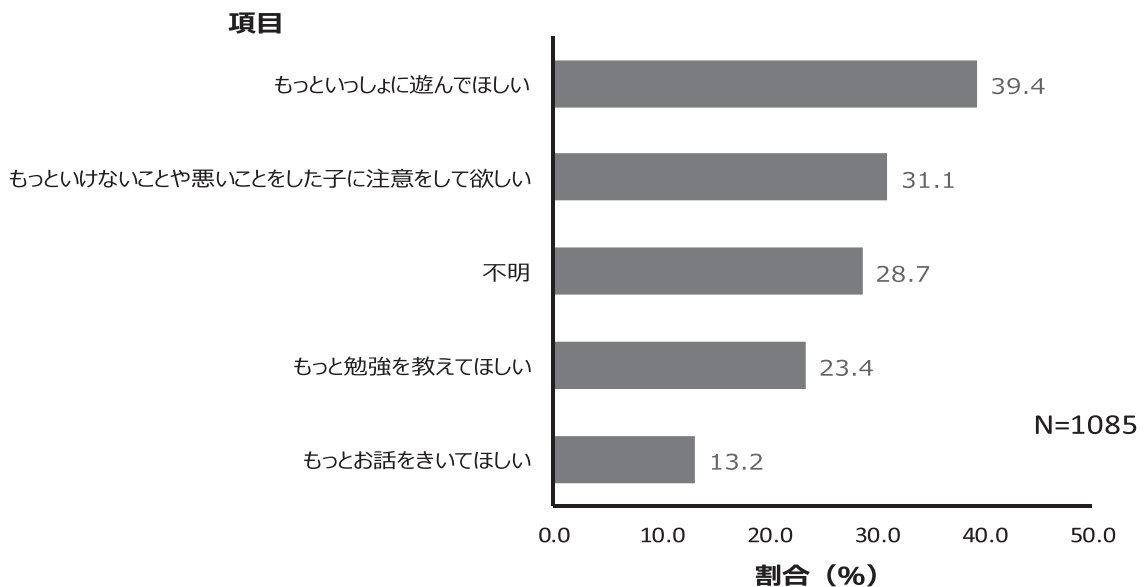
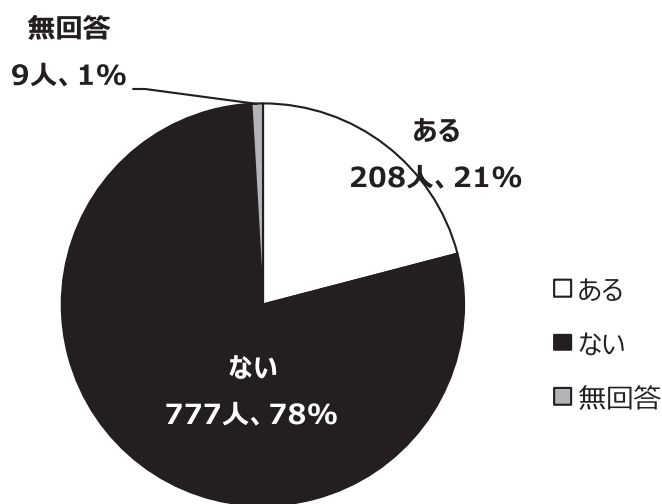


Figure 5-20 先生（職員）にしてほしいことの内容と回答者の割合（低学年）

(2) 職員への要望 (高学年)

高学年では、「ある」が208人(20.9%)で低学年同様、約2割が職員にして欲しいことがあると回答していた (Figure 5-21)。高学年では、「ある」と回答した人にその場合、どんなことをして欲しいと考えているかについて尋ねた (Figure 5-22)。その結果、低学年では2番目に多かった「もっといけないことや悪いことをした子に注意をして欲しい」が最も多く107人(51.44%)で5割以上の子は職員の支援のあり方についての要望があることが示された。Table 5-7で挙げられた「困っていること」

にも繋がる回答であり、Figure 5-14で示したように、職員が注意をしてくれるか否かについては、概ね「している」と回答しているが、一部の放課後児童クラブにおいて、現状では、落ち着かない状況や、多くの子どもたちが生活している中で職員が対応に苦慮しており、子どもたちのその様子を感じていることも推察される。



N=994

Figure 5-21 「先生にしてほしいことがありますか？」 (高学年)

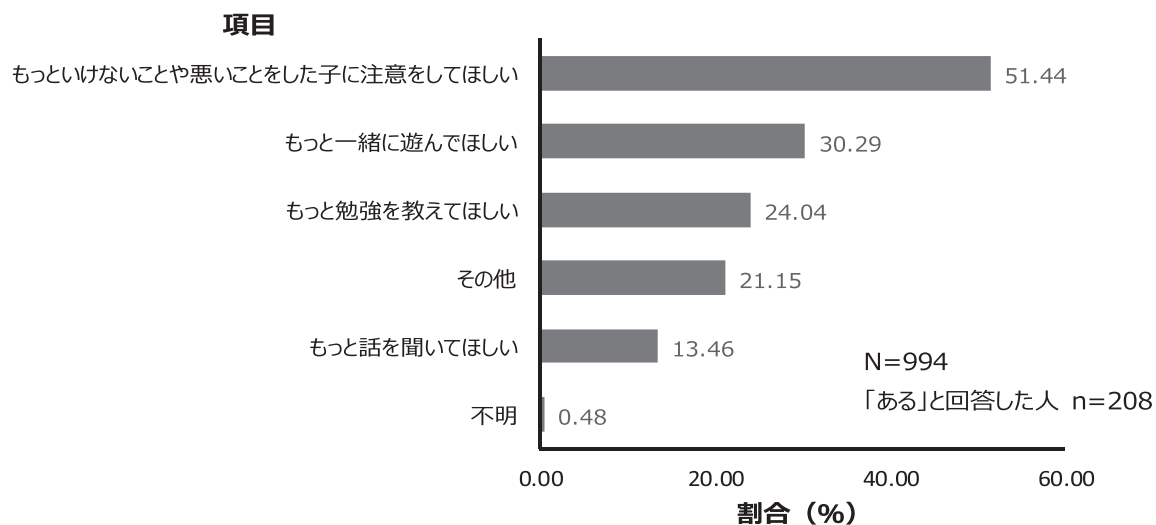


Figure 5-22 先生（職員）にしてほしいことが「ある」と回答した人 (n=208) のその内容と回答者の割合 (高学年)

また、その他と回答した場合の自由記述をまとめたものを Table 5-8 に示した。同じ回答は整理し、カテゴリに分けた結果である。これらを見ると、『職員に関すること』として「いやなことをされたときに先生が本気で注意しない」、「もっと強く注意してほしい」などが書かれている。その他、『遊びや設備に関すること』としては、「おもちゃを増やして欲しい」などに代表されるような、遊び道具の追加や自身のしたいことなどが記載されていた。『ルールや活動に関すること』では、「もっとみんなで遊ぶ時間を増やして欲しい」と希望する子どももいれば「もっと静かにして欲しい」など静穏空間を求める子どももいた。ここでは、1つの意見ではあるが、これらの個々の子どもニーズに十分応え得る居室の配置、それに応じた職員配置などには限界があることも推測される。また、それらに応えることが必ずしも必要なことであるのかも含めてクラブ内外の研修等で検討することが必要かもしれない。関わる上で職員が困っているのか、子どもたちが何に困っているのか、についての聞き取りも必要だろう。

(3) 放課後児童クラブの活動に対する要望

児童クラブでしたいこととしての要望は、低学年では「外遊び」が最も多く、636人(58.6%)、次いで「ゲーム」が502人(46.3%)であった。「料理」や「お出かけ」などの要望も高いが、「宿題やお勉強」もほぼ同じように、したいこととして挙げられていた (Figure 5-23)。

高学年では、「ゲーム」が最も多く、464人(46.7%)、次いで「インターネット・パソコン」が455人(45.8%)、「外遊び」が422人(42.5%)と、低学年よりも室内遊びとしての遊びや活動を希望している子どもが増えていた。ゲームやパソコンなどではできるのであれば遊びたい、というところもあり、設備としてなければ、別の遊びを考えることもできると思われるが、年齢による違いが見られたと言え、これらの遊具や設備を整えられるのであれば、それに応じた使い方などのルールも必要となる。ただ、職員の対応や環境、予算の都合で子どもたちの要望に

応えない、という点であるならば考慮の余地はあるかもしれない。遊び方、使い方のレクチャーやルールの決め方などを職員が考え、子どもたちも一緒に考えることがあれば、子ども自身の知識や、他者との関係づくりの学びにも繋がる可能性はある。

2015年の対象年齢の改訂にともない、小学生というくくりながらもかなり、年齢層に開きがある集団を扱う場所である。単純に人数が増えるという問題ではなく、個々の子どもたちへの関わりでは身体面、心理面での発達の違いを考慮した対応が必要となる。また、集団であることからその力動をも考慮することが求められる。その中でも特に配慮が必要な子どももいれば、保護者への対応に苦慮することや、地域性なども活動や支援に影響することが想定され、職員の専門性や力量が問われることになるだろう。

また、「その他」として挙げられていた具体的な内容を整理したものが Table 5-9 (低学年) 及び、Table 5-10 (高学年) である。イベントを希望する子どもたちの記述は、低学年、高学年ともいくつか挙げられていたが、上記のような年齢幅のある子どもたちを対象とした場合、やはり子どもの安全面への配慮や職員の準備等に割く時間、費用(予算)など考慮すべき課題は多いだろう。研修との関連でいえば、イベントを行っている児童クラブがあるとするれば、どういった工夫をして対応しているか、地域資源を活かした取り組みのあり方など、先進的な児童クラブの視察や紹介が研修として設定されることも、児童クラブ同士の横の繋がりや連携、情報交換、意見交換などの設定と併せて必要かもしれない。

Table 5-8 先生（職員）への要望（して欲しいこと）その他の具体的な内容

カテゴリ	具体的な内容
遊びや設備に関すること	おもちゃをふやしてほしい 遊びのレパートリーをふやしてほしい 手づくりおひるをふやして。たつきゅうしたい。 糸毛をつかって工作をしたい おもしろいかそうしてほしい！ しょうぎをやってほしい ほかにもあそびをついかしてほしい マジックショーや劇、ダンス マンガの本を増やしてほしい ゲーム、パソコン もう少し本を増やしてほしい…
ルールや、活動に関すること	外遊びをさせてほしい。 みんなで遊ぶ時間をふやしてほしい。 もっといろいろなところにつれてってほしい。 せきをじゆうにしてほしい ルールをへらす あそぶ時間がいっぱいほしい。1時30分ぐらい 学習時間を長くしてほしい 学童の時間をふやしてほしい。 もっと部屋をしずかにしてほしい
おやつ	おやつがもっと食べたい。 おやつの種類をふやしてほしい おやつをふやしてほしい
職員に関すること	いやなことをされたときに先生が本気で注意しない すぐにおこらないでほしい もっといじらないようにしてほしい まちがいをみとめてほしい もっと強く注意してほしい。 わるくない人をおこらないでほしい 一年生にやさしすぎ！ 外遊びのトラブルを一緒にかい決してほしい
その他	今までのことをつづけてほしい 特にない

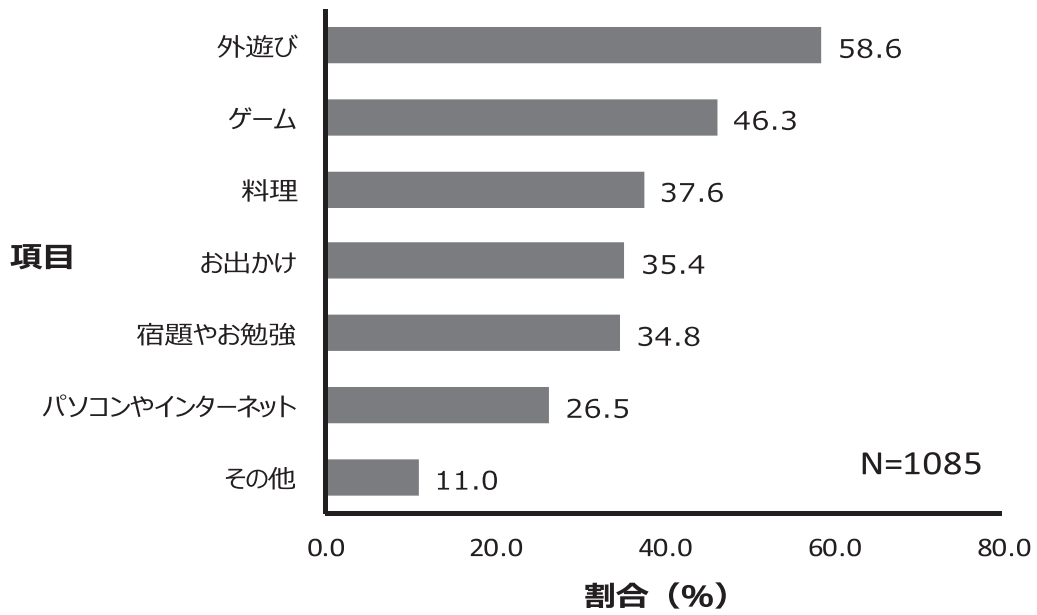


Figure 5-23 クラブでしたいことの内容と回答者の割合（低学年）

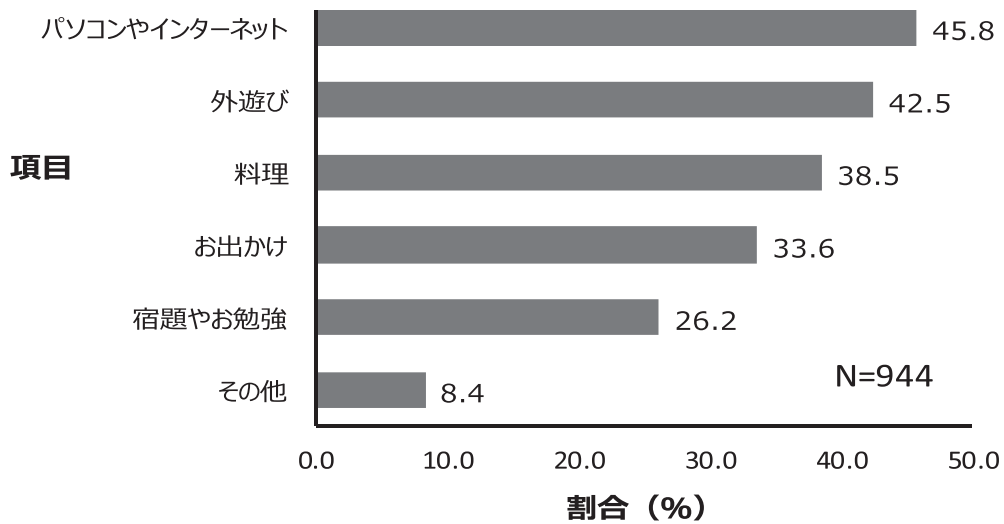


Figure 5-24 クラブでしたいことの内容と回答者の割合（高学年）

Table 5-9 放課後児童クラブでしたいこと「その他」の具体的な内容（低学年）

遊び	
DVDをずっとみたい	すわってできるあそび
WiiU	つみきで、あそぶ
なわとび・おおなわとび	テレビを見たい
いじんでんのクイズ	ドッチビー
工作	チャンバラ
おにんぎょうつくりたいです。	ドイツゲーム
おにごっこ	とび箱
おもちゃあそび	トランプ
おりがみ	トランポリン
ピアノ・オルガンをひきたい	ローラスケート
カードゲーム	ビーズ
かんけり	ぬりえ
きのぼり	プラバンづくり
サッカー	ブロック
じんせいゲーム	ボール遊び
だるまさんがころんだとかくれんぼ（外で）	マンガをよみたい
リコーダー	読書
手げい	体育館遊び
ツイスター	ニンテンドースイッチ、カセットマイクラ
卓球	一りん車
イベント	活動
うんどうのたいかい	飲みものをのみみたい
えんそく	おひるね
おとまり	外出
お楽しみ会を増やしてほしい	公園にあそびに行く
げき	自由遊び
ゲストをよぶ	へやであそぶ
さっかーきょうしつ	何まいでもおりがみやぬりえをとっていいことにしたい
サメにのりたい	運動十分させてもらっていますが、もっとしたい。
さんぼ	学どうの内であそぶ
やきゅうたいかい	友達をふやしたい
りょうり	もっと体育館であそびたい
りょうこう	
ワークショップみたいな工作をしてみたい	希望
サマーキャンプ	4年生になっても通いたい
自転車の練習	家であそぶ
自分たちでかかくをかながえる。	家にかえりたい
実験	今のままで楽しい
習字やピアノの練習	ない
プール（学校）	備品
えい国のべん強	室内遊びでゲームなど遊ぶものをふやしてほしいです
だがしや	図書館、ベット
	本をふやしてほしい。
職員との関わり	
先生と、そうじ	先生ともっといっぱいあそびたい

Table 5-10 放課後児童クラブでしたいこと「その他」の具体的な内容（高学年）

遊び	イベント
イラスト	いろいろなところに行きたい。
オセロ	おたのしみ会
キーボード・ピアノなどの楽器	おばけやしきを作る（先生）
ゲーム機	きゅうぎじょうに行く
けん玉	ごはんをたべに行く
工作	ドッジボール大会に出場したい。
手芸・編み物	お宿まり、りょこう、かしきりで、ゆうえんち
読書・まんが	パーティー（昔よくやっていた）
麻雀、ラミキューブ	遠足・夏には、プール
みんながたのしめるボードゲームとかが、ほしい	習い事系、習字、体そうなど。
ユーチューブを見たり、動画をしらべる	学童で動物をかう（インコ、金ぎよなど）
絵をかくボードがほしい。	先生にマジックをしてほしい
人形あそび（リカちゃん）	
	活動
卓球	おひるね
テニス	おやつを食べる。
バスケ	お買い物おやつ
バレーボール	かっくに帰ること
つり	ガムをたべたい
テレビ	クラスがえ
カラオケ	話し合い
映画をみたい	マンガを読みたい。（ためにならないといって。かくされた。）
	外遊びの時間を長くほしい
その他	
5分～10分の中で静かにする時間をとってほしい。	学童に行っていない子と遊びたい。
家にかえりたい	学童の人、全員でいろんな遊びをしてみたい。
いまのままでいい	他の学年とも交流したい。今は学年で分けて活動しているから。
ない	体育館などを開放して遊ぶ。
学習道具	大の字でねる。おせんべいかじりながらおちゃのむ、こたつほしい
ケータイ	勉強以外全て

5-6 放課後児童クラブを利用している子どもの満足感

最後に、子どもの放課後児童クラブ全般に対する満足感を100点満点で記載してもらった。全般に、得点は高く、1000点、10000点などの得点については、欠損値として取り扱い、分析から除外したが、中央値が低学年で99点、高学年で90点となっていた。ここでは、低学年（Figure 5-25）、高学年（Figure 5-26）別に学年ごと性別別の平均値を示した。いずれも80点以上となっており、最も得点が高かったのは、1年生であった。男女に差は殆どなかった。その他の学年では、5年生以外の学年では、女兒の得点の方が概ね平均得点は高く、5年生のみ、男児

の得点が高くなっていた。上記で述べたように、個別の困り感や、不満等は伺えるものの、職員の支援内容などへの評価も肯定的なものが多かった。これらを反映した結果であると考えられる。しかし、先でも指摘したが、調査対象とし、協力してくれた子どもたちの選別に偏りがあった可能性は否定できない。協力的であることが、既にバイアスであることはあり得る。子どもにとっては、自らが過ごす場所が「児童クラブ」であり、その他のところと比較することが難しい。それだけにこれらの結果の解釈については慎重になることが求められる。

アンケート調査結果

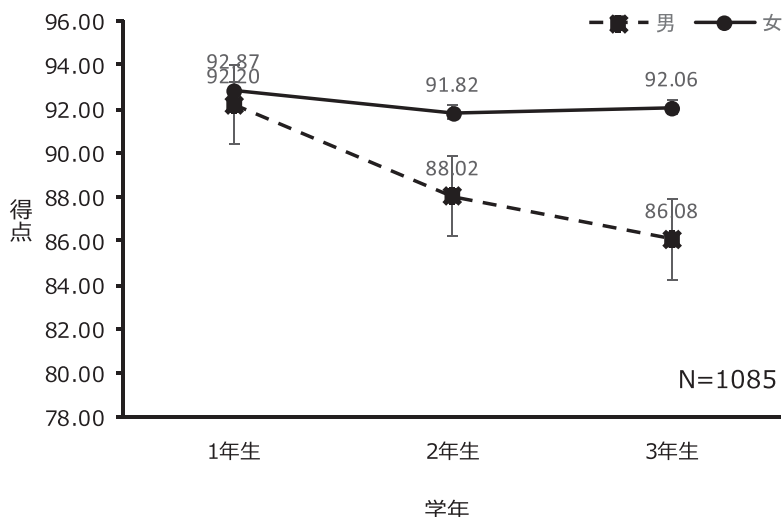


Figure 5-25 満足感（低学年）

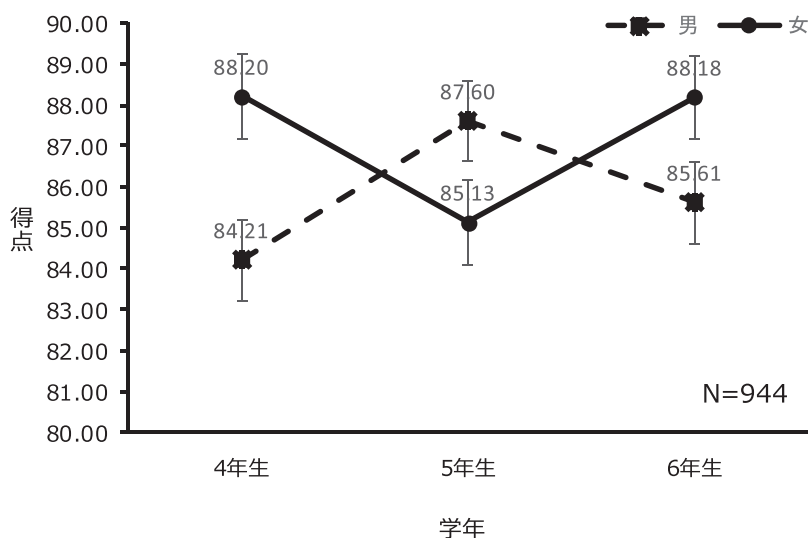


Figure 5-25 満足感（高学年）

まとめ

全般に、肯定的な回答が多かった。子どもたちの居場所として児童クラブが機能している側面も伺える。一方で、先にも指摘したが、調査対象者として、協力的であることが、既にバイアスであることはあり得る。慎重であるとともに、個々の個人的な意見は、その他多くの子どもたちの声として捉えることもできるかもしれない。現在、さまざまな形態や、実情の差異があることが自治体、放課後児童クラブそのものの調査によっても明らかになっている。こ

れらの運営の在り方や環境によって、子どもの意見や満足感等に際はあるのかといった詳細な検討が今後必要である。また、子どものニーズや権利擁護だけでなく、保護者のニーズも加味して今後の支援体制を考えて行くには、児童クラブの運営指針と地域に果たす役割等とバランスをとる必要がある。管理者による運営のあり方、個々の職員の具体的な支援方法を絶えず見直していくことが求められ、量的な支援だけでない、質的な支援の向上、多様な子どもたち、保護者への対応を実践できる専門性を身に付

けることが求められていると言えるだろう。

職員に対する研修について考えると、これらのデータを「子どもの意見」として提示し、どう職員としては取り上げるのか、どう読み取り、年齢や発達を考慮した際、子どもの言葉をどのような可能性が考えられるものと思うか（考えられるか）、などを考える機会とすることで活かすことは可能である。また、他の施設や現状を知り、これからの支援について考えられることを検討するなどのグループワークには繋げることができるのではないだろうか。